

## アトモスフィア

## 生化学会大会と春季シンポジウム

村松 喬\*

「生化学会の大会がこのごろ刺激的である。」多くの方がそう感じていらっしゃると思う。特に2001年の京都での大会は谷口直之会頭の下に幾つかの新機軸が採り入れられた。朝食つきの教育セミナーは若い人には特に好評であったが、私にとっても他の分野の知識をまとめるのに大いに役立った。最も素晴らしかったのはシンポジウムに一般演題からのピックアップが行われたことである。最新の発見を若手が沢山の聴衆の前で発表できることになる。私の領域では Developmental Cell に載る仕事の内容を、このピックアップのおかげでいち早く聞くことが出来た。2001年の大会は、何年かかけて行われた生化学会大会の改革の集大成であったようである。1993年の将来計画委員会(本庶委員会)答申は革新的で、この方針の下に、学術集会企画委員会の設置、複数年契約で会場(横浜パシフィコと京都国際会館)の確保、キーワードの見直しなどが行われてきた(生化学, 皆で語ろう生化学の未来を, 70巻, p.151-163, 1998)。本庶委員会の答申の中には「学会が各大会のメインテーマを決め学問的なメッセージを会員に送ること」がある。この点については、今のところ会頭の選出に学問的メッセージをこめることで行われている。今後は「学問的メッセージ」の内容がより重要になっていくであろう。

春季シンポジウムは支部の活性化をも視野に入れ1995年から始まった。そして、日本ケミカルリサーチ社の多大なご援助の下に1997年から5年間はCGGHシンポジウムという名称の下に開かれた。わが国から新しい情報を発信するという旗印の下に、海外から10名もしくはそれ以上のシンポジストを招いた国際シンポジウムというのがCGGHシンポジウムのスタイルであった。少数の大家よりも多数の第一線の研究者を招きたいとの願いから、演者の旅費はディスカウント航空券を基に計算された。CGGHシンポジウムでは演者と参加者の科学的な交流も重視され、ミート・ザ・スピーカーから始まり、1999年鳴門市でのタンパク質分解酵素に関するシンポジウムはゴードンカンファレンス式の全員泊まり込みで行われた。2001年をもってCGGHシンポジウムは所定の計画を終了した。オーガナイザーの方々にCGGHシンポジウムを振り返って頂いたが、多くの方がこのような企画の重要性を述べていらっしやった(生化学, 73巻, pp.489-495, 2001)。

2002年からは装いも新たにJBSバイオフィロンティアシンポジウムが始まる。日本ケミカルリサーチ社から引き継ぎご援助を頂き、日本生化学会からの新たな援助を加え、中規模の国際シンポジウムを開催することにしたのである。主旨はCGGHシンポジウムと同じであり、機動性に富むフロンティア指向のシンポジウムを意図している。既に、2002年、2003年度のシンポジウムが生化学誌上に公募され、新企画が動き始めた。JBSバイオフィロンティアシンポジウムは春季シンポジウムの一スタイルであり、生化学会の従来の企画の伝統を受け継いでいる。ことに、近年、大会の開催地が横浜と京都に集斂しつつあり、各支部の偏りのない発展を意図する生化学会としては、JBSバイオフィロンティアシンポジウムは、これ以外の地区での開催を歓迎している。と同時に、JBSバイオフィロンティアシンポジウムは新しい学問のフロンティアを開くものであり、若手、中堅による企画は歓迎されるであろう。そして、若手、中堅の層が関東と関西に厚いことも事実である。そのため、しばらくの間、この二つの立場をバランス良く取ることになると思われる。2002年、最初のバイオフィロンティアシンポジウムは九州で開かれる。そして、2003年のシンポジウムは、地域的なわくを取り払っていることが公告された。諸外国の研究者との交流の中でわが国からの情報の発信の可能性はますます増加しているが、資金難のため、機会をあきらめた方も多と思う。JBSバイオフィロンティアシンポジウムを日本生化学会の新しい活動としてご記憶頂きたい。

\*名古屋大学医学研究科；学術集会企画委員会委員長